

中東の日本研究 拠点・カイロ大学

長野 隆

▼下▲

とどまった。
この九月に、その盛大な記念事業が催されたが、昨年から準備が進められ、私は当初その実行委員長という立場に置かれ、記念シンポジウムや日本文化紹介のプログラムその他を推進する役割について、カイロ大学・国際交流基金・在エジプト日本大使館の三者協同のたび重なる会議を経て、パネリストやタレントの人選、またそれに伴う経費の出所、何しろ意義はさておき、国情に分不相応なまでの記念事業の規模は、日本側のバックアップなしには成立しようにもない。

そもそも何を機縁に日本研究が始まったかといえ、一九七〇年代初めの石油ショックにあわせた日本政府が、アラブ世界との交流を意識して始めた日本語教育に端緒を見る。そのため、国際交流基金(The Japan Foundation)を窓口にして日本語講師や客員教授の派遣はもとより教材・器材等の支援を強力に推進し、ようやく根づいたといいききだ。それがカイロ大学の日本語日本文学科の創設であり、今年で二十五周年を迎えることになった経緯で、九月八日の記念式典、九日から十二日

■25周年事業で蓄積示す■

日本文学のシンポジウムの一コマ。左から筆者、藤井貞和、鈴木貞美、川村湊の各氏

までのシンポジウム、そのほかの実現をみたのである。記念講演には、黒田壽郎、池田修二氏のアラビア語による日本語教育の歴史やその特徴が述べられ、九日のセッションでは、サウジアラビア、イラン、トルコ、バハレーン、シリアなどから、中東における日本語教育の現状が報告された。そして十一日午前の「日本思想」のセッションには、山口昌夫氏、子安宣邦氏、松永昌三氏らの基調報告に基づき

質疑応答。午後の部では、藤井貞和氏、鈴木貞美氏、川村湊氏らによる「日本文学の特質」と題されたセッションがなされた。これが私が司会兼コメンテーターの任に当たったのは言うまでもない。藤井氏の「日本文学の古典的形成」、鈴木氏の「日本語で文学」という二つのテーマが、今後の研究の拠点が、今後も多くの有能な学生を輩出するべく、みずから自立せんことを私は願ってやまない。

「先生、また来て下さい。私も日本へ行きます」と口をそろえて言った学生たちの笑顔を忘れず、私の一年にわたるカイロでの生活が、生涯の思い出の強い一コマとして刻まれようとしていることを、ようやく、しみじみと感じるこのころである。

(弘大教育学部教授)

この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです